

■1月20日(土) 新年親睦交流会を開催

1月20日(土)アルカディア市ヶ谷において、恒例の新年親睦交流会を開催し、30人の会員に参加をいただき、親睦を深めました。

また、調布木島平交流クラブから佐藤会長以下3名、早稲田大学「わせだいら」と東京農業大学から学生6名が参加し、木島平村を応援するという同じ目的を持つ団体どうし親睦を深めました。

村からは、内藤副村長が参加し、ふるさと木島平村の活性化に向けて、会員の皆様と様々な意見が交わされました。

「わせだいら」とは、本会の発展に向けて、様々な形で連携していくことを確認しており、当日も村での活動報告や今後に向けた活動方針などを発表していただきました。

新年会の最後には、村歌「栄え行け木島平よ」と県歌「信濃の国」、「木島平中学校校歌」を歌い、楽しいひと時はあっという間に過ぎていきました。



新年親睦交流会は、毎年この時期に開催しています。来年も多くの会員の皆様の参加をお待ちしています。

■総会の日程変更について

例年、6月の第一土曜日に開催しておりますふるさと応援団木島平会の総会ですが、今年は次のとおり日程を変更して開催します。ご予定の変更をお願いいたします。

ふるさと応援団総会

- ◆日時 平成30年5月26日(土) 正午から
- ◆会場 アルカディア市ヶ谷私学会館

鬼島太鼓

定期公演『春を弾つ』



- *日時：3月24日(土)
- *開場：午後1時30分
- *開演：午後2時～4時
- *場所：調布市文化会館
たづくり2階
くすのきホール
- *先着：500名(先着順)
- *料金：入場無料

ふるまわの思い出 あれこれ

東京都八王子市 石川 安雄（西町出身）

街中でも2m以上の積雪があるころ、大人達は長さ1間〜1.5間もあるスキー状の板（現在のスキージャンプ用を厚くした様な）を横棒でくり付けた様な橇で山から木材を運び出す。冬の間は誰も通らない道路を橇棒と綱だけのコントロールで新田川の橋近くの貯木場へと運ぶ。

山から下ってくるその橇のスピードと言ったらすごい早さで、暴れ牛が飛んで跳ねている様であった。貯木場に到着して、橇に積んであった木材を降ろすと大人達の仕事は終わる。

その貯木場では何人かの子供達が何かを探している。木材を橇に積む時、途中でゆるみなど出ない様、30〜40cm位の木の枝を使って締めるが、荷を降ろすと用済みとなる。その枝を集めて持ち帰るのが子供達の役どころなのだ。勿論薪にする為だ。

春になって道路の雪が消えると、その貯木場へオンボロなトラックが来る。トラックの燃料は木炭で、立ち登る煙の臭いは子供には香ばしかった。木炭車の火おこしのハンドルは珍しく、子供達は代わる代わる回した。

こんなトラックの来る頃、田んぼの畔にはフキントが出る。毎年出るところは決まっていて、人の採った後は良いものがないので、我先に採ったものだ。

芹も日本芹と台湾芹（クレソン）があつて、意外と知られていない台湾芹の新芽はやわらかで、ちよつと辛みはあるがおいしい。

アマナ（野甘草）、のびろ、アサツキ、ツクシ、フキなども毎年採った。八王子の我が家ではアマナは甘い酢みそでヌタ風にして、台湾芹はサラダに、フキは葉もきざんで煮て食べる。その他、スイコ、竹ズイコなどその場をかじった。とても酸っぱかった。

豊富な野の山菜採りが終り、田植えが済んで稲穂が重くなり出すと盆おどり。中町では盆じやものや仮装大会をやっていて、身体中泥だらけにして「土人」で出場した従兄弟が入賞したのを覚えてる。中町が終ると、人々は場所を移して西町へ来る。さつまおどりだ。盆じやものと違って難しい。西町のさつまおどりは踊り手

が少なく淋しくなる。自分も一度も踊りに参加した事がない。

盆おどりが終る頃か、田んぼで稲穂が黄金色になる。手ぬぐいを二ツ折にして縫った袋に、竹筒を口に付けたものを持って田んぼへイナゴ獲りに行く。畔だけでなく実り間近な稲穂の波をかき分けてイナゴを追う。獲れたイナゴは中学校の大釜で茹でたりした。

稲を刈る、ハゼに掛けて干す、3〜5段のハゼ掛けでは、下から一束ずつ放り上げると、上に居る兄達がナイスキヤツチして干した。

また、稲刈りが終わった田んぼで落穂拾いをした。現在の様な機械のない時代、手で刈った後は落穂が結構あつた。この落穂は母たちの手で子供達のごはんの足しになった。

農作物の収穫が一段落した秋晴れの日、学校のグラウンドでは村民運動会も行われた。子供心に競争は楽しいものだったが、なんといつてもお弁当の時間が待ち遠しかった。おむすびにおいなりさん、赤飯もあつたかな。

お重に詰めた煮物、チクワ、コンニャク、枝豆、そして茹で栗、山栗だったので粒は小さかったがおいしかった。

綱引きやリレーでは随分盛り上っていたが、今覚えているのはマラソンだった。毎年の事だが、一人だけ必ずトップでテープを切るスーパースターがいた。後続を断然引きはなしてグラウンドに現れる人、糠千のSさんだった。

最近では姪の子の雄麻君が頑張っていると村の広報が時々伝えていた。

木炭車が来なくなつた初夏だったか、ドッドドッドとものすごい騒音を響かせて、村の砂利道を一台のオート三輪車が土煙をあげて行き過ぎた。

オート三輪のハンドルは今のママチャリの様なものだった。村（上木島）では初めての自動車であり、農協が買入れたものだった。モーターゼーションの始まりと云う事か。

あれもこれも今はなつかしい思い出。昭和30年以前の話。戦後たつた10年でこんなにも世の中が変化して行く。

78歳を過ぎた今、「写メ」「デジカメ」「スマホ」など、氾濫している「短縮語」に付いて行くのがやっとなつたこの頃の自分を思う。